
僕が望む全て

桜真理恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が望む全て

【Nコード】

N7554X

【作者名】

桜真理恵

【あらすじ】

公爵家の長男・コーネリアスには、恋してやまない許嫁・セシリアと結婚できない理由があった。全7章の予定です。近世イギリスを舞台にした、ファンタジー設定を含む恋愛小説です。

改行少なめ、文字多めです。気をつけてはおりますが、携帯からは読みにくいかも知れません。

1 (前書き)

近世のイギリスを舞台にしています。
妙なところがありましたら申し訳ありません。><。

彼女はおよそ『淑女』とは言えない少女だったと思ひ出す。……
少なくとも、自分の前では。

屋敷の南側にある自分の居間の大きな窓。今も屋敷内に住む乳母が見たら、自分が教えていたことは無駄だったのかと嘆かれること請け合いの格好で窓枠に座る。開け放たれた大きな窓、その窓枠に腰掛け、脚を組む。銀色に煌めく黄金色の美しい瞳を、何処を見るわけでもなく、遠い空気に向けている。結ばずにおいた漆黒の髪を、暖かな風が優しく絡め取るうとしていく。

頬を撫でる緩やかな空気。……ここに吹く風は何故ロンドンと似ても似つかないのだろう。

久しぶりに領地に舞い戻り、『彼女』はすれ違いにロンドンへ行っていると言われ、今度はそちらに意識が流れてゆく。同じ空気、同じ風。なのに、行く先々で違ったものに感じるのは、気候の所為だけではない気がする。

そういえばセシリアが言っていた、何処に行こうとも、自分が幸せだと思える時間を過ごした場所にいちばん素敵な風が吹く、とそれはきつと、この屋敷のことだ……。彼は結論づけた。もしくは……。

ふわりと風が甘い薫りを運んでくる。花の香りだろうか。……何という名の花だろう。彼女が居れば教えてもらえるのだが。

そこで気付く。続けて苦い笑みが口元に浮かぶ。ロンドンでは浮き名を流す自分が、身の周りで起こることを思う時、全て彼女に帰結するのはどうしたことか。手を髪にやり、すつとかき上げる。柔らかい眼差しで、彼女の屋敷の方角をなんとは無しに眺めた。

折角帰ってきたのに、ここに居ないなんて。ロンドンに居るのなら、知らせてくれれば、彼女の用が済むのを待って、一緒に帰って

来ただろうに。何の為に、馬を何度も変えて、休みも取らずに帰ってきたのか……。

そこでまた新しい事実気付く。そうか、僕は彼女に逢えると思つて、あんなに急いで帰ってきたのだ。また笑みが浮かんだが、今度の笑みは優しかった。しかし、その瞳は暗い憂いを宿している。

「仕方のない奴だな、コーネリアス・バートランド。」
自分で叱咤してみる。

今度の帰宅は、そのセシリアとの婚約を破棄する為なのに。婚約といつてもお披露目もしていないし、本人同士にその気がないと納得させれば解消できるだろう。ただ……自分以外の全員が二人の結婚を期待しているだけだ。

自分以外の全員。

自分「以外」だと？

コーネリアスは苦笑を漏らした。

コーネリアス・バートランドは、シアリーズ公爵家の長男である。シアリーズ公爵家は何代か遡れば王弟にたどり着くという由緒正しい公爵家であり、祖父にあたる先代の公爵が起こした事業も、小さいながらも成功している。

祖父から父へと引き継がれた事業は、現在ではコーネリアスが動かしている。今のところ、成功していると自負しているが、父もそれを認めてくれていたのかも知れない。コーネリアスが育った屋敷とは別の場所に、継母と共に新しい居を構えて何年にもなる父が、お前もそろそろ身を固めると煩く言ってくる。今までは、学業や仕事に忙しいからと先延ばしにいられた。

ところが、この冬に父が倒れ、容態は芳しくないと言われ、エールが言つてよこした。

「少しでも早く結婚してくれないかしら、コーネリアス。死ぬ前に孫の顔が見たいと仰るのよ。」

先月、見舞いに行ったら、とうとう最終宣告とも言える台詞を聞

かされた。勿論その言葉は、セシリアとの結婚を示していたのだらう。

レイチエルと父が再婚したのは彼が13になる年だった。もう10年も前の話だ。実の母はさる貴族の令嬢だったが、駆け落ち同然で父の元に嫁いで来た為、家族とは疎遠になっていたと聞いている。その母は彼が幼い頃に病で亡くなってしまった。

自分の生母のことを知らなければ、と思う前にも、不思議に思ったことはあった。公爵家に嫁ぐのに何故駆け落ちなのか、と。

傲慢な言い方ではあるが、爵位があると言うだけで魅力を感じる人間は多い。そして称号を鼻にかけるような輩も数多い。大抵の親は喜んで娘を嫁がせてくるものだ。

……それが何故？ 答えは簡単だ、どちらかの家族が反対した為だらう。

ではどちらの家族なのか？ その答えは分からない。或いは両方かも知れない。しかしコーネリアスの父が束ねるシアリーズ公爵家に関して言うならば、数え切れない親戚たちは欲深な人間が多い。とは言っても、シアリーズ公爵はその最高位にある。親戚たちの反対など、簡単に押し切れる筈である。

父の母であるコーネリアスの祖母は傲慢ではあるが人格者だ。更に彼女はロマンスを深く信仰している。祖母自身が、祖父に一目惚れされるといふ壮大なロマンスを経験している。父がこの人だと言ったなら、例えそれが何の身分もない、例えば粉屋の娘でも、喜んで受け入れるのではないだろうか。

シアリーズ公爵家は地所からの収益や、事業のおかげで財産に困っているわけでもなく、嫁いでくる女性の持参金はあてにせず済む。加えて祖母は社交界での地位や評判などはあまり気にしない、変わり者だと言われる類の女性だった。ということは、生母の家族が反対していたことになる。

後に、彼が母について尋ねて回った時、皆が口を揃えて言うことは、如何に両親が愛し合っていたかということや、如何に素晴らし

い女性だったかということ、母方の家族については誰も知らなかった。……口を閉ざしているのか、本当に知らないのか……。

彼はそれ以上、誰にも訊かなかった。レイチエルの手前もあつたし、知るのが怖いというのもあつた。コーネリアスは今でも生母については多くを知らず、生母の出身に関しては全く知らないままであつた。

母を亡くした後、妻を溺愛していた父の嘆き様は凄まじく、何年も再婚の勧めを断つてばかりいた。跡を継ぐべき息子が一人しか居ないのはシアリーズ公爵家全体の問題だと、親戚が一様に抗議したが、一人居れば充分だと父はすげなく言つてかえしたと語り草になつている。夫婦の両方に愛人が居るのが当たり前だと言われる当世にあつて、父のそんな態度は珍しく、領地に住む人々にはとても好意的に写つたらしい。

それはそうだろう、とコーネリアスは思っている。誰だつて自分たちが納めている税を愛人に注ぎ込むような領主など、お断りなのだから。

父がレイチエルと再婚したいきさつには、息子であるコーネリアスも多大に関わつていた。レイチエルは素晴らしい女性だった。父を心から愛してくれる。

少々荒療治ではあつたが、コーネリアス少年は祖母、レディ・イザベラを巻き込んで策を弄し、更には領地内の人々の手を借りて、それを成功させたのだつた。そのお影とは言わないが、父も素晴らしく幸せに暮らしている。

……冬に倒れるまでは。

あんなに幸せそうにしていたレイチエルも、青い顔をしていた。

彼が見舞いに行くと、ずっと実の息子のように接してくれていたレイチエルも多少は色を戻したが、不安を口にするうちに、頭に血が上つたらしく、赤い顔をして、彼に断つて席を立つてしまった。こ

れはいよいよ困ったことになったらしい。コーネリアスは実は、途方に暮れていたのだった。

自分の心に、僅かに残った夢を、この手で握りつぶさなければならぬ。

そしてその瞬間はもう、先延ばしには出来ないらしい……。

1 (後書き)

長いお話の幕開けです。

書き溜めはあるのですが、更新はゆっくりになると思います。

セシーリアは領地の境界を接する、名だたる名家、フェザーランド家の一人娘である。コーネリアスとセシーリアの父親同士は幼なじみであり、無二の親友であった。

フェザーランド夫妻には、ボームント家のような壮大なロマンスは訪れなかったが、夫婦仲は良く、フェザーランド卿は気弱な妻を気遣ってか、夫人への愛のためか、愛人も居ないという話である。また、フェザーランド家の女主人は病気がちで、触れれば折れてしまいそうな雰囲気のある夫人である。セシーリアを授かったのも奇跡だと言われた程であり、フェザーランド家には後を継ぐべき子どもがセシーリアしかいない。

長年、親しく行き来していた二つの家で、一人息子と一人娘の将来を期待するのは自然なことなのかも知れない。幼い頃から、ことあるごとに「セシーリアを大事にするんだぞ」とか「娘を幸せにしてやってくれ」とか、振り返れば二人の結婚を前提としているような言葉をかけられていた。

爽やかな風を浴び、窓辺に座ったまま居間を振り返ると、壁にくつつかの小さな肖像画がかかっているのが目に入る。その中の一枚の肖像を眺める。その絵はとても精巧に描かれていた。昔ながらのイギリスの花がごとく、金糸の様なブロンド。薔薇色に染まった、透き通るような白い肌。5〜6歳の頃のセシーリアが、きらきらとこちらに微笑みかけていた。

コーネリアスは、彼女の髪が、日に透けると赤味を加えたようなストロベリーブロンド、月光の下では月明かりをそのまま髪にしたようなプラチナブロンドに見えることを知っていた。

そしてセシーリアは不思議な瞳の色の持ち主だった。

コーネリアスは彼女と初めて言葉を交わした時のことを思い返し

ていた。

そう、彼女はとてもお転婆で、弾けるように笑う、陽光の塊のような少女だった。

最初に彼女に逢ったのは彼女が生まれて間もない時だったらしい。ということは、コーネリアスは6歳になる直前だと思われる。しかし彼自身はそのことを覚えていない。フェザースランド卿は父の無二の親友だったし、父にとって何の気兼ねも要らない数少ない友人の一人であり、妻を亡くした悲しみに浸っていた父を心配してよく訪ねてくれた恩人だった。

自然、フェザースランド夫人もよく伴われており、彼らが家にいることは多かったのである。が、フェザースランド夫人は出産後、滅多に外出しなくなった。もとより家の中で静かに過ごすのが好きな彼女は、娘と共に留守の番をする方を好んだ。

それによつて、コーネリアスが未来の妻と期待されている少女と、それと知らずに出逢ったのは、父に伴われて産後のお祝いに行った時が初め、そしてフェザースランド卿が流行病で寝込んでしまった見舞いに行った時が二度目だった。

コーネリアスはフェザースランド卿をとて慕っていて、どうしても部屋まで見舞うと言つて聞かなかったが、流行病は感染するからと、寝室に入れてもらえなかった。そこでふてくされて庭の散策に出かけたコーネリアスは、庭のはずれで声もなく泣き崩れている少女を見つけた。

大きな樹が密集した庭のはずれ。小さな少女が、消えてしまおうというように小さく、丸く蹲っていた。

それまでも、コーネリアスには沢山の友人が居たし、小さな女の子も沢山知っていた。

けれど彼は泣きじゃくっている女の子の扱い方など知らなかった。見なかったことにして屋敷の反対側の庭に行こうかとも思ったが、

どうしてもその場を動けず、少女を見守っていた。

僕よりかなり年下の様だ。小さな女の子を相手に、何故石のように固まってるんだ？

そう思ったが、声を殺して肩を振るわせる、そのあまりに哀しい泣き方に近寄ることはおろか、声をかけることも出来ないでいた。

一頻り涙をこぼし、彼の見守る前で涙を拭った彼女は、ゆっくりと振り向いた。

コーネリアスは息が止まるかと思った。少女の瞳は新しい涙が溜まり、影を作った大きな樹を背にして、その瞳だけが細かく揺れる輝きを放っている。目の前に居るのはまだ小さな少女なのに、彼はこれほど美しい光景を見たことがないと思った。

「だあれ？」

まだしゃくりあげながら、驚きもせず少女が訪ねる。そこで初めてコーネリアスは動けるようになった。黙って彼女の側まで歩いていき、その小さな手を取り、それまで木陰で隠れるようにしていた少女を、陽の光の中に連れ出す。

そのまま木陰においておくと、闇に捕らわれて連れ去られてしまふのではないかと恐怖に似た思いが胸をよぎったのだ。

夏の日光のもとで、そのカールしたストロベリーブロンドがきらきらと輝く。その輝きに目を奪われながら、俯いている少女に声をかけた。

「君はだれ？ここはフェザーランド卿のお庭だよ。……何故泣いているの？」

コーネリアスの口から飛び出す早口の質問に、少女は俯いたまま、しばらく何も言わなかった。

怖がっているのかと思ったが、俯いた少女の後頭部に心配げな眼差しを投げかけているうちに、彼女が涙を押し戻そうと苦戦しているのだと気付いた。呼吸さえ押し殺している様だ。自分の身の、胸にさえ届かない小さな身体を震わせながら必死に俯く少女に、何故だか胸が痛んだ。無力な自分にできることを懸命に探したが、見知

らぬ少女相手に、どうして良いのか、皆目見当がつかない。

少女の小さな手を捉えていた自分の両手を、彼女の頭と背にやる。腹のあたりが濡れていくのを感じる。そのまま軽く抱きしめてその震えが去るのを待った。時折背中をさすり、頭を撫でた。今思えば、自分が知っていた唯一の慰め方だったのだと思う。母を思って泣いた夜に乳母や父が、同じやり方で慰めてくれたことを思い出したのは、そのずっと後だった。

2 (後書き)

増やしたつもりなのですが、まだ改行が少ないでしょうか……・

3 (前書き)

小さなセシリアとの思い出は続きます。

しばらくそのまま居ると、肩を大きく震わせた少女が、絞り出すようにつぶやいた。息と嗚咽の合間に少しづつ言葉らしきものが発せられる。

『とうさまが死んじゃったらどうしよう』。とぎれとぎれの言葉をつなげると、彼女が言ったのはそういうことらしい。

よく訪ねてくるフェザーランド卿が、可愛くて仕方のない愛娘の話を頻繁にするのでコーネリアスは『セシーリア』の名前を知っていた。ではこの少女がフェザーランド卿の令嬢なのか。

蹲って泣いていた少女は、聞いていた年齢よりも幼く見えた。新しい目で少女の髪を見下ろす。

そういえば、フェザーランド卿はブロンドだったっけ……。

本人の嘆きを無視して後退してしまっている髪は、確かに薄い金色だった。コーネリアスと同じ漆黒の髪をふさふささせている父に、フェザーランド卿はよく自分の広すぎる額をネタに笑っていた。これでも昔は美男子で通っていたのになあ、と。君の父上と僕は、ご婦人方にとっても評判が良かったんだよ、コーネリアス。そうは見えないかも知れないけれどね。

彼はとても陽気な話し相手だった。

セシーリアにとれば最愛の父。不安で仕方がないのも無理の無からぬことだろう。フェザーランド夫人はその体の弱さ故、他の誰よりも、流行病から離しておかなければならない、と、フェザーランド卿の意向で、コーネリアスの祖母、イザベラの屋敷に滞在している。セシーリアは母と共に祖母の屋敷に行ったと聞いていたのに。

「きつと大丈夫だよ。」

コーネリアスは優しく声をかけた。フェザーランド家の屋敷では使用人が落ち着きをなくし、父でさえ青い顔をしていたのを、彼は言わずにおいた。気休めだとは思ったが、それでも彼女を泣かせて

おいて、その場に佇んでいたくはなかった。……なんとしても。

そのまま兄のように抱きしめてみると、少女の肩が次第に落ち着いてきた。コーネリアスは同時に自分の心も落ち着いていくのを感じていた。少女がやっと話出す頃には、安堵に近い気持ちになっていた。

掠れた鼻声で少女は言った。顔をコーネリアスの服に埋めたまま、やはりところどころでつつかえながら。

「あたし、セシーリア。」

コーネリアスは、知っている、と言いかけて止めた。代わりに言ってみる。

「まつげ（シリア）？」

案の定少女は怒って言った。

「セシーリア！」

「よろしく、まつげちゃん（ミス・シリア）。」

嘆きが怒りに代わっただけで、彼は高揚した気持ちになっていた。

「セシーリアだってば!!!」

怒った彼女はぱつと顔を上げた。

目が合う。

その瞳とぶつかって、言い返そうとしていた言葉を忘れた。

視界いっぱい彼女の目が見えているような気がしていた。頭の中は真っ白で、その両目しか見えない。僕は誰で彼女は誰なのか……？

自分の心臓を射抜かれた気さえした。

グリーンとブルーの瞳。

木陰で見たときはブルーだと思った。けれど陽の光で間近に見ると、それは左右違う色の瞳だった。驚嘆する。……心臓が肋骨を突き破るくらいに。……そうだ、これは驚嘆だ。そうに決まってる。

目をそらすことが出来なくなった。コーネリアスから向かって左側の瞳は砕けたガラスのような深い勿忘草の色。いや、ブルーのダイヤモンドかも知れない。僕は見たことないけど。

右側の目は形容しがたく美しいブルーグリーンの瞳だった。空の色でもなく、木の葉の色でもなく……この色は何て言うんだろう……？ レイチエルがいつも付けているエメラルドより、柔らかく、そして青い。

そこまで考えたが、彼女にからかいの言葉を返した。

「わかってるよ、まつげちゃん。」

幸いなことに、かなり経っていると思った驚愕の時間は、彼女が瞬きする一瞬だけだったらしい。頬を染めて、彼女は切り返した。

「あなたってとびきりイヤなひとね!!」

良かった、彼女は激怒しているらしい。その不思議に美しい瞳に、悲しみの断片が残っていないことを確かめながら、コーネリアスは言った。

「コーネリアスだよ。」

彼女はきらきら光る瞳をコーネリアスに向けたまま、ぼんやりと言った。彼女の思考が、父親に戻っていくのが分かった。

「こんにちは、コニー。」

霞がかかったような瞳に涙が戻るのを恐れて、コーネリアスは慌てて言った。

「コーネリアスって呼んでよ。」

少女がきょとんとしてコーネリアスを見上げる。その目に自分が映っていることに、妙な満足感を覚えた。

「なぜコニーじゃだめなの？」

別に駄目じゃない。不思議そうに見つめられて、更に慌てて言葉を探す。乳母や庭師たちはいつも僕を『コニー坊ちゃん』と呼ぶ。

……でも駄目なことになきゃ。

ふん、と鼻を鳴らしてから、鼻にしわを寄せた。

「『コニー』じゃまるで赤ちゃんだろ？」

一瞬間をおいて、セシーリアが弾けるように笑った。音が弾んでいるように聞こえた。……きらきらと。笑っている。今度こそコー

ネリアスは心からほっとした。自分の顔が幸せそうに微笑んでいることには気付いていなかった。

彼女が笑い終える前に、彼は声をかけた。

「君の瞳って、片方ずつ違うんだね。」

その問いかけに彼女は誇らしげに応えた。

「そうよ、『オッド・アイ』っていうの。……かあさまが教えてくれたのよ。」

コーネリアスを通り越して屋敷を見た少女は、微笑みを消して言った。

「とうさまが、とても珍しい、素敵な瞳だつて。」

コーネリアスは舌をかみ切りたくなつた。

外見の話なんて、両親に繋がるに決まってるじゃないか！

「『奇妙な目』?」

瞳に無邪気さをみなぎらせ、るように努力して、からかい続けることにしたコーネリアスは言った。『odd』^{オッド}という単語の意味のひとつは『奇妙な』。明らかに気分を害したらしい小さな女の子は肩を怒らせて言った。

「『片方の目』よ!」

勿論『片方の』という意味もある。彼の腕から逃れて、続ける。

「もおっ!あなたさつきから、わざとあたしをからかっているの?!」

怒りが冷めなさそうなのに少し安心して、彼は軽く言い返した。

「ごめん、まつげちゃん。初めて見たものだから。」

涼しい顔で言つてのける。セシーリアは美しい髪を逆立てそんな勢いで怒っていた。

「さよなら、ミスター・コーニー!!!」

言い残してぷりぷりしながら屋敷の方に向かっていく。彼女が、暫くは涙を浮かべたりしないであろうことが嬉しくて、コーネリアスは笑った。……腹の底から。

笑い声が耳に届いたらしいセシーリアは、ちらりとコーネリアスを一瞥し、

「レディに向かつて失礼しちゃっわー!!」
とぶつぶつ言いながら、屋敷に戻っていった。およそレディらしからぬ足取りで。

それが彼女と最初に言葉を交わした時のこと。

3 (後書き)

とりあえず、今日の更新はここまでです。
あと1話分で第1章が終了する予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7554x/>

僕が望む全て

2011年10月20日08時20分発行